「誕生」と「教え」

●「親鸞聖人御誕生850年･立教開宗800年慶讃法要」

今（2023年春）、京都の浄土真宗本願寺派の本山･本願寺では、「親鸞聖人御誕生850年･立教開宗800年慶讃法要」を勤めています。
親鸞聖人の「お誕生」と浄土真宗の「教え」が開かれたことを、それぞれ、850年、800年の節目に当たってお祝いする法要です。
さて私は、この法要を次のような意味を持っていると味わっています。

生まれながらの人間を、理想の人格へ導くもの

「ゴータマをして、ブッダたらしめたのは、法である」

という言葉を若き日に、少し驚きをもって聞いたことがあります。
ゴータマ･シッダールタとは、出家前、北インドのネパールに近い地の釈迦族の王子だった頃のお釈迦様の名前です（ゴータマとは、最上の牛という姓。シッダールタとは、アルタ〈目的〉をシッダ〈成就、完成〉するものという名）。
ブッダとは、目覚めた者（さとった人）ということです。
法とは、この文章では、天地宇宙の時間と空間を貫く、すべては因縁によって生起するという普遍の道理（インドのサンスクリット語で、ダルマ）です。

この文章をこの「誕生850年･立教開宗800年」の言葉に重ねてみました。

「松若丸をして、親鸞たらしめたのは、本願である」

松若丸とは、京都、日野の里、日野家の貴族の子どもだった頃の親鸞聖人の幼名です。
親鸞とは、ここでは念仏の信心の人（念仏を生活習慣としてまことに目覚めた者）ということで受け止めたいと思います。
本願とは、阿弥陀仏の願い、迷いの私たちを目覚めさせ、新しい人格へ育てる教え、その（生起本末、初めから終わりまでの）道理ということです。

●先天的要素と後天的要素の巡り合わせ

今回の慶讃法要で打ち立てたられている、「誕生」と「教え」という二つの出来事には、次のような人間を形成する要素をもとにしていると考えてみようと思います。

「誕生」――先天的生得的な要素――人身受け難し
「教え」――後天的学習的な要素――仏法聞き難し

誰でも、この世に誕生したということは、そこに人間として、先天的で生得的なものを恵まれたということです。
それは、同じ「いのち」あるものとして生まれながらも、他の生物、動物とは異なる人間らしい素質を恵まれたということです。
しかし、その人間の素質、ありようとは、生きるものの本質として、残念ながら誰もが自己中心的で、身勝手な姿があります。
生きるためには、自分の都合の良いことは受け入れ、あるいは貪ってでも手に入れようとします。また、都合の悪いことは拒絶し、あるいは怒って追い払おうとします。
それが元となって、人間の分別という自己中心という迷いからの判断を生み出し、そして、やがて、様々な文化･文明や技術･産業などを作っていきます。

ところがその人間は、親や社会（他者）との接触を通して「教え」（生き方）に出遇うことで、後天的で学習的なものを恵まれていきます。
それは、倫理や道徳、秩序や法律、あるいは、合理性や人権意識など幅広くあります。
希望や夢、期待や不安などを抱えて来日した留学生ウィシュマ･サンダマリさんの身の上に起こったことに心を寄せたり、新たな生き方を求めて来た技能実習生やウクライナからの人びとの生活に心を寄せるのも、後天的に学習を通した私に生まれたものです。
教えに出遇うことで、自己中心的な自分に気づき、新しい生き方に育てられていきます。

●人身、受け難し。仏法、聞き難し。

礼讃文（各宗共通、なお、漢文の読み下しに違いはある）

人身、受け難し、今、己に受く、
仏法、聞き難し、今、己に聞く。

この身、今生に向かって度せずんば、
さらにいずれの生に向かってか、この身を度せん。

上から目線で人間以外の生物に向き合って、人として生まれることが出来たことを「よかった、よかった」と受け止めることもあるかもしれません。
しかし、今、示したように、先天的要素と後天的要素をもとにして、しみじみと、この私が人として生まれたことを味わう言葉が仏教にあります。
それが、各宗派の違いを超えて、仏教徒としての集いにあたって読まれる「礼讃文」です。
「人身、受け難し、今、己に受く」
という言葉には、ただ単に、生物学的な誕生ということに留まる意味合いではないということが、次の言葉に裏付けされています。

「仏法、聞き難し、今、己に聞く」
この言葉には、人間であるこの私は、やがて、仏法という教えに出遇い、それを受け止められる可能性のある「身」を頂いたことへの感銘と重なり合っているように思います。

親鸞聖人の出遇った、阿弥陀仏の本願（第十八願）が勧める念仏という「教え」（生き方）は、念仏そのものの必然として、私の「いのち」を根源的に目覚めさせるという働きをもっています。
私が世俗の中に生きながらも、念仏一行を選びとって、真摯に生きていくならば、この私とこの世のありようが根源的に問われてくるという働きがあります。
親鸞聖人は、私が仏に向けて称える念仏を、仏が私に向けて呼びかけている、
「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」
という呼び声と聞いていくこと、つまり、仏の名を聞く「聞名」こそが、まことの念仏だと受け止めています。
親鸞聖人の誕生と立教開宗という年回りに当たって、それぞれのお立場で、「この私」を育ててくれる「教え」というものを大切に思い起こしていただければ幸甚です。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。